猿新聞

獣害の歴史

獣害問題を歴史的に振り返るとき、江戸時代では猪垣を築いたり、寝ずの番したりの苦闘の歴史があります。近代では戦後の国土総合開発や拡大造林政策など、社会的問題がクローズアップされ見えてきます。

その昔、私たちの先祖は自然の恵みを獣や鳥と分け合う採集生活から離れ、田んぼや畑を開いて食べてゆく、農耕という安定した道を選びました。

その農耕が原因で野生動物と人間の付き合い方に大きな摩擦が生じ、これまで「山の幸」であったシカやイノシシは害獣と呼ばれるようになり縄文後期では、農作物を荒らす害獣として有害駆除の対象となっていきます。

だが、縄文時代～江戸時代まで主要な野生動物の分布域は、大きく変化することなく、人は先住者である野生動物と多様な関わりをもちながら共存の歴史を築いてきたのです。

獣害は各地で深刻さを増しているので、新しい問題であると考えられがちですが、獣害は人間が農耕を始めた縄文時代後期からあるのです。今後、人と野生動物の適切な関係を構築するためには、太古の昔、先人は野生動物とどのように接してきたのか、その動物観はどのように変わってきたのか、以下、歴史を通して人の動物に対する捉え方や関わり方を振り返ってみたいと思います。

縄文時代では、食糧を得る目的での狩猟と平行してイノシシを飼育していたという記録があります。その名残として各地に猪飼部（いかいべ）・猪飼野（いかいの）（大阪市）など人名や地名がいまだに残っています。縄文時代すでに飼育という形で人間とイノシシは、共生を図られていたのです。

縄文時代の地層から出土する獣骨の量が考古学者が予想するより遥かに少なく、それに加え幼獣の骨は、ほとんど出土しないといいます。必要以上に捕ったり、幼獣の捕獲を避けたというのは、縄文人の節度と東洋的思想が大きく関わっていたと考えられていますが、その他に、持続可能な共存の道を探っていたのではないかという説もあります。

弥生時代の稲作農業の本格化が獣害の始まりといっても過言ではありません。人間が栽培する作物に野生動物が執着し食害するのは当然の結果といえます。

江戸時代には人口増加に伴う農耕地の拡大により、各地でイノシシやシカなどによる被害が増加しています。食糧事情が豊かな現代と違って、昔はイノシシの被害が人の生死にかかわったといわれています。

村人たちは収穫期には田畑に小屋を建てて交代で寝ずの番をしたり、何キロも続くシシ垣を構築したり、犬もまた追い払うために活躍していました。「かかし」や「しし脅し」も獣害防除の装置として使用。また、狩りの達者な者に対応（有害駆除）を依頼したり、ありとあらゆる対策を行っています。その中でもシシ垣は、集落全体を囲むように造られていて、江戸時代すでに棲み分け共存を考えての対策であったように考えられています。

対馬の猪垣
対馬の写真素材より引用

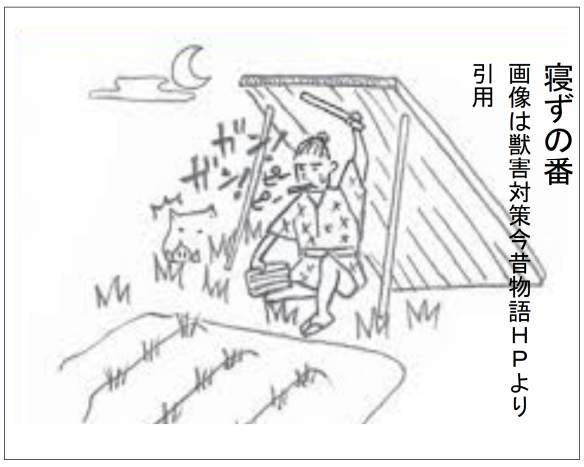
農耕の開始以降、人と野生動物は基本的には対立的関係で、それが現代に至り、さらに熾烈（しれつ）化してきています。太古より私たち人間は野生動物から作物を守るために、多大な労力と時間割いてきているのです。

七世紀以降、歴代の天皇は、たびたび肉食禁止令を発令しています。江戸時代には徳川綱吉が肉食禁止令を出しています。それ以降は禁止令こそ出されていませんが、人々の心の中に「肉食＝悪しきもの」という観念が刻み込まれました。奈良時代、肉食禁止令が出されていましたが、民衆の間では狩猟によって得られた鳥獣の肉は口にしていたようです。また、江戸時代、徳川綱吉は確かに動物を保護しようとしましたが、イノシシやシカなどの農業の害獣の駆除についてはその限りではなかったようで、武士より農民の方が多くの鉄砲を持っていて、その理由が獣害対策であったといいます。いずれにしても、両時代の肉食禁止令は獣害対策には大きな影響はなかったようです。

明治から昭和30年代頃には狩猟による捕獲数の増加、人口増加に伴う開発など、いくつかの間接、直接要因が複合的に作用し、大型野生動物の生息数や分布域の縮小や地域個体群の絶滅などがもたらされています。

この頃は、山の近くで畑を耕作していてもそもそも動物がいなかったので、野生動物による農作物被害はありませんでした。しかし、人と動物の関わりの長い歴史から見れば、この１００年が異常な１００年だったのです。

現在では、国が野生動物の保護政策を推進して40～50年が経っており、動物の数も増えました。また、昭和中期での拡大造林や燃料革命（薪炭燃料から化石燃料に移行）での森林の荒廃やオオカミの絶滅、ハンターの激減などで、動物が奥山から下りてきやすくなりました。現在の野生動物の激増化は、こういった社会背景の基（もと）で、起こっている現象であると考えられています。



寝ずの番
画像は獣害対策今昔物語ＨＰより引用

野生動物は、このように人間の活動と自然環境の相互作用の中で生きていくしかなければならないという宿命のなかで、激増・激減を繰り返してきているのです。

野生動物は気象条件の厳しい山奥よりも平地に下りて来たいと思っています。特にサルやイノシシは平地の方が好きなのです。すでにサルたちは、生活の場を奥山から人間エリアに移してきています。

昭和45（１９７０）年、犬の放し飼いが禁止されるまで、犬が獣害防除の重要な一端を担っていたのです。飼い犬の放し飼いが禁止された時期と、シカやイノシシの農作物被害が目立ち始めた時期が、ほぼ一致することから推して犬たちによる抑止力は間違いなくあったと考えられます。

現代、オオカミ再導入論が起こっていますが、日本人の国民性を考える時、現状のままでは多分無理だと考えられています。であれば、まずは「飼い犬」の放し飼いを禁止している法令を変え、放し飼いに伴うリスクを最小限に抑える措置を行い、犬の能力を発揮させることにより、獣害対策に活用することは可能だと考えます。

現在、多くの犬たちは繋（けいりゅう）留されたまま散歩もさせてもらえず飼い殺し状態にされていることが多いことを考える時、オオカミ再導入論よりも日本人には受け入れ安いと思います。

中山間地域で人間の営みや狩猟活動が、野生動物への適度な圧力にもなっていました。しかし、平成にはいり農村の少子高齢化や狩猟者の減少で、農村が自律的に持っていた防御システムが徐々に機能しなくなり、その結果、野生動物への人為的な圧力が失われてしまっています。

そもそも私たちが暮らす平野や盆地は、かつては野生動物の生息地であったのですが、それを人間が住居地や農耕地として開拓し、動物を奥山へと押しやってきた経緯があります。

人間からの圧力が弱まった今、動物たちは自らが生きていく上で最良の土地を目指し、いわばＵターンを始めているのです。

20世紀半ばまでの我が国における野生鳥獣への対応は、農林業をはじめとした産業を優先するという側面が強く、生態系並びに生物資源の利用においても持続性の確保が考慮されていなく、無意識のうちに自然環境への配慮を欠いた行動をとり、生活の利便性を求めてきました。その結果、多くの野生生物の生息環境が悪化し、豊かな自然環境を維持していくために必要な生物の多様性が失われようとしています。自然が破壊され野生生物が減少していくことは、私たち人間にとっても無関係ではありません。地球上の生物はそれぞれ深く関わり合って生きているのです。

近年、野生動物との共存という議論が盛んになってきていますが、歴史を振り返るとき野生動物との共存というテーマは、そう簡単に答えが出るようなものではなさそうです。

歴史を振り返るとき、野生動物の多くは人の活動と密接な関係を保ちながら生息・生育してきたということが知ることが出来ます。

現在の農山村の過疎化の要因は、獣害問題がその一つの要因になっているのです。今後は、山村の活性化や次世代のためにも獣害問題を共存問題と捉え、歴史を振り返り先人の知恵を借りながら棲み分け・共存を図っていかなければなりません。

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:220部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:30部

講習会開催

去る、11月23日名張鳥獣害問題連絡会では、恒例の獣害対策講習会を、つつじが丘自治連合会、名張市産業部、三重県中央農業改良普及センター、三重県伊賀地域農業改良普及センターのご協力を得て開催いたしました。

会場風景

農山村での鳥獣害は、営農意欲の減退や、耕作放棄地の増加などをもたらし、数字に現れる以上に深刻な影響を及ぼしています。

鳥獣害は決して農作物に限った話ではなく、列車・自動車との衝突事故や、偶発的な人身事故など、市民生活に密着した問題に拡大しつつあり、今後は、一般市民生活にも及ぶことが予想されることから、一般市民のニーズに沿ったグローバルな観点から獣害対策を考える必要があります。

講師と講演内容

①名張Ａ群の現状と対策
名張鳥獣害問題連絡会
会員　古川　高志

②みんなで取り組む獣害対策
三重県中央域農業改良普及センター
主査　木村　宏 氏

三重県伊賀地域農業改良普及センター
主幹　市川　昌樹 氏

③獣害対策の現況とサルドコネット
名張市農林資源室
仙頭　賢 氏

当日は土曜日の夜にもかかわらず、多数の出席者があり、スライドを見ながら講師の話に熱心に聞き入っておられました。

チョット一服

今年はネズミ年です。早々、ネコとネズミの話を、まんが「日本昔ばなし」より引用しました。

『ネコとネズミ』

むかしむかし、薬の商いをしている商家に一匹のネコが飼われておりました。このネコ、暑いのも寒いのも嫌い、寝ることだけが好きという横着（おうちゃくもの）者でした。そうして、この商家の天井裏にはたくさんのネズミも住んでいました。

ある年の大晦日のことです。家の人達は大掃除や正月の飾り付けで大わらわ。ところがネコは、いつもと変わらず寝てばかりいたので炬燵（こたつ）から追い出されてしまいました。仕方なくネコはネズミ達の所に行き、「今日一日決して君達を捕って食べたりしないから、この暖かい天井裏で昼寝させてくれ～。」と頼みました。

ネズミの大将が「言葉だけでは安心できん。今日一日、爪と牙を我々に預けてくれれば、ここに置いてやっても良い。」と言うと、ネコはしぶしぶネズミ達に自分の爪と牙を抜いて預けました。そうしてネコは暖かい天井裏でたっぷり昼寝を楽しんだのでした。

やがて夜になると天井裏も冷えてきたので、ネコは階下に降りることにしました。ところがネズミ達は、今日一日預かる約束だからと、爪と牙を返してくれません。

ネコが仕方なく階下に降りて行くと、商家の主人に正月の餅の見張りをするように言いつけられました。ネコがしぶしぶ餅の番をしていると、やがて除夜の鐘が鳴り始めました。するとネズミの大群が現れ、楽しげに歌いながら大事な餅を次々と運び出しはじめるではありませんか。

ネコが怒ってネズミを捕まえようとしても、爪のない肉球の間からするりと逃げてしまうし、牙のない口で噛みついてもネズミ達はくすぐったいと笑いだす始末。そうして除夜の鐘が鳴り終わる頃には、ネズミ達はすっかり餅を運び出してしまいました。そうして呆然としているネコの前に、天井裏から爪と牙がパラパラと落ちてきたのでした。

結局、ネズミ達は好物の餅を腹いっぱい食べて大喜びの正月を過ごし、あのネコは餅の番もできぬ役立たずと追いかけられ、散々な泣き正月になったということです。

サルを知ろう①

獣害対策の基本は、加害獣の特徴をよく知ることです。獣害は加害種の生態的特徴によって対策を変えなければなりません。今年は原点に返り、各、加害獣の生態・特徴などをシリーズで検索していきたいと思っています。先ずサルから…

サルの五感、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚は人間とほぼ同じといわれています。

記憶力は抜群で一度味わった恐怖体験は忘れません。場所や状況なども覚えています。

土地への執着は深いが、群れ同士のバランスがくずれたり、環境に大きな変化があれば新しい土地に適応する柔軟さもあります。

新しいものや状況、場所を警戒しますが、いったん慣れると大胆に行動します。人慣れが進むと追い払うのは難しくなります。

群れで行動するので、数頭が柵越えできてエサにありつけても他のサルが入れないとそのエサ場はあきらめます。

早朝と夕方が採食のピークで、日の出から日没までの明るい時間帯だけ活発に行動し、夜間は活動しません。

群れによる集団で行動し、決まった行動範囲の中で周期的に動きます。群れはメスと子どもを中心に構成され、十数頭から百頭を超えることもあります。

オスは大人になると群れを離れて単独で行動したり、他の群れに移ったりします。また、高い学習能力を持ち集落内の食べられるものを少しずつ覚えていきます。木登りとジャンプが得意で、足は人間の手ほどの機能があります。野生の群れではボスはおらず、群れの動きは成獣のメスに追従しています。

サル出没状況

名張Ａ群出没状況は古川　高志さん報告。

11月中旬～12月中旬の行動について

この間、例年通り青蓮寺湖・ひなち湖にそれぞれ行っています。

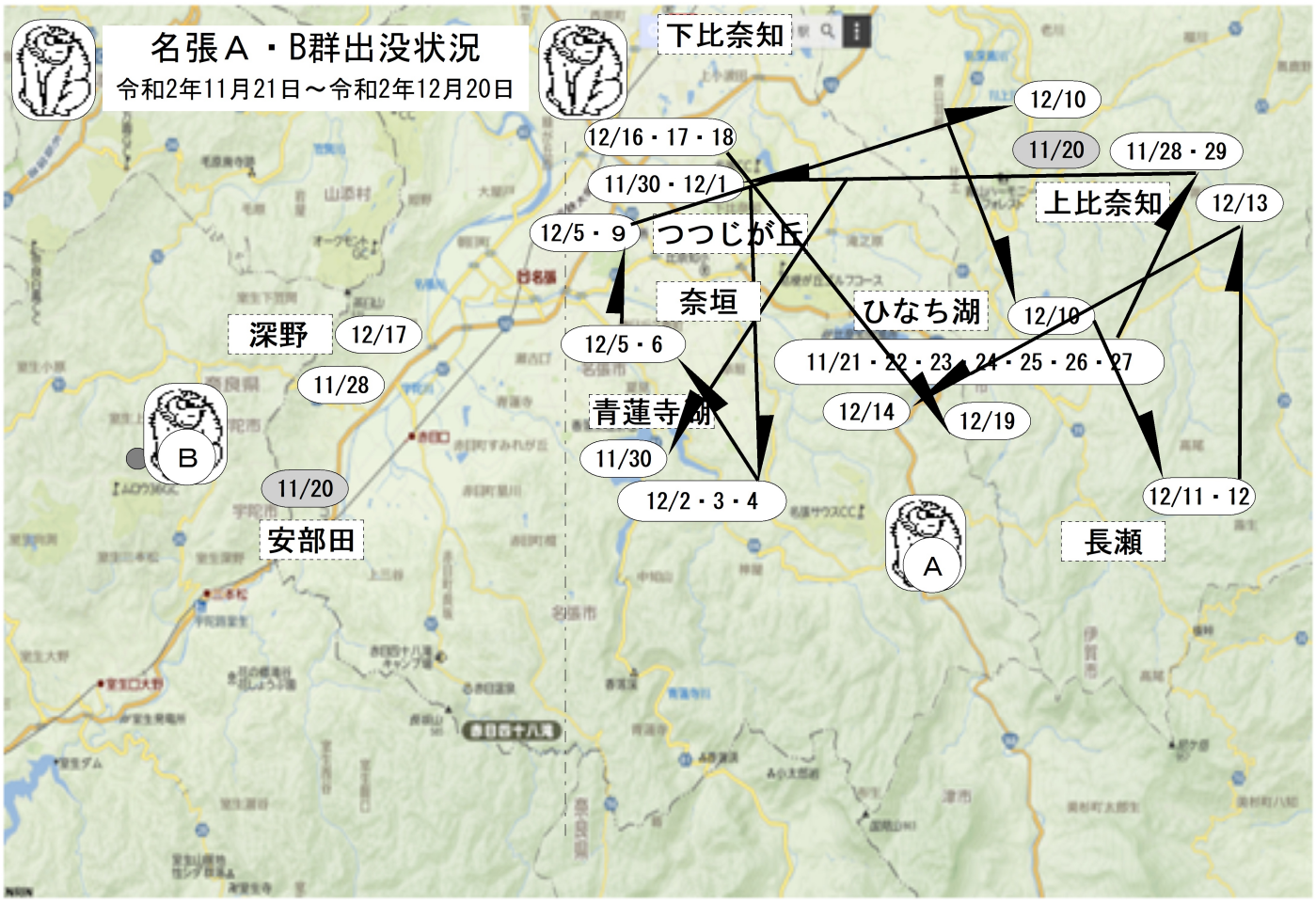
青蓮寺湖では今回は中知山集落周辺が多かったです。

ひなち湖では一番南の天王大橋付近に集中して行動。一部は長瀬の入り口まで行っています。ここ数年、南の長瀬集落には行かなくなっています。

今期の特徴は、しばらく行かなかった奈垣集落に数日間滞在したことで、主に柿を食害。

それと先日来つつじが丘西側の宅地内に侵入し始めたことです、

冬になって食べ物が少なくなっているので宅地内のみかんなどを狙っています。これからは干し柿が狙われると思いますので注意が必要です。



現在２頭の大人のオスのハナレが群れから少し離れて同行しています。これが問題で群れを追っても逃げません。心して追っていきたいと思っています。

今年も何卒よろしくお願いいたします。

名張Ｂ群は、情報によると個体数が増加しているように思われます。11月25日には、名張市安部田、石橋自動車裏の柿に20頭ほど現れたとの情報があります。Ｂ群ではテレメトリー発信器装着のサルがいないので、現在のところ目視情報に頼っている状態です。

発信器装着ザルの早急な導入を、Ｂ群エリア住民は望んでいます。

両群共、個体数の調査を早急に実施する必要があります。

謹賀新年

明けましておめでとうございます。

本年もさらなる紙面充実に向け、気持ちを新たに取り組んでまいりますので、お気付きの点、何なりとご指導いただければ幸いです。

本年も変わらぬご協力のほど心よりお願い申し上げます。

令和二年元旦